小中連携に関わる課題の把握と共有化

ーある中学校区における連携初期段階を事例としてー

吉田衆一*・佐々木司

Recognizing and Sharing the Problems Concerining Student Transition from Elementary School to Junior High School: Participatory Action Research in the Early Stage of Interschool Cooperation

Shuichi Yoshida*, Tsukasa Sasaki

(Received September 26, 2008)

はじめに

学校間連携の時代である。幼小、小中、中高、高大など隣接２校種間の連携だけでなく、なかには幼小中といった３校種間の連携すら行っているところがある。「連携」が学校教育における時代のキーワードになっているといっても過言ではあるまい。そのなかでも小学校と中学校の間の連携はすでに多くの実践が行われている。全日本中学校長会が実施した調査によれば、82％の中学校が小学校と何らかの連携を実施しているという[1)]。

周知のように、義務教育９年間の継続的指導はここ10年における重点的文教施策であった。昨年、一昨年と、義務教育［として行われる普通教育］の目的（教育基本法第５条２項)、９年を見通した義務教育の目標（学校教育法第21条）が定められ、関連の法整備も完了したが、これにより小学校と中学校の教育を初等教育、前期中等教育と区分したかつての捉え方は姿を消し、代わって小学校と中学校をともに「義務教育」の目的を実現し、目標を達成するための学校とする見方、位置づけ方が採用された。今後は、小学校と中学校を義務教育としての目標を達成するための学校として一体的なものとする捉え方がさらに加速すると思われる[2)]。

しかしいくら小学校と中学校がともに義務教育を施す学校であるとはいえ、そもそも別々の学校である。制度、文化、様式などにおいて異なる点も多い[3)]。自然にまかせておけば連携は進む、といったものでもない。体制作りや方針の策定は、特に連携初期段階において取り組まなければならない重要事項であるが、その際、現状を知るための課題の把握とその共有化が大切になる。ところが筆者の知る限りでは、案外とこれがなされていない。多くの小・中学校がすでに連携を開始しているわけだが、時流に乗ってとりあえず連携という舟を漕ぎ出しただけの学校もあるように思われる。連携の時代であればこそ、課題をしっかり把握し、それが共有されなければ、海図も羅針盤も持たずにただ港の周辺を漂うだけになってしまいはせぬか。筆者２名はいずれも平成17年頃から、複数の中学校区において小中連携に関与し始めた。ある時は単独で、ある時は協働して、連携推進のために調査を行ったり、意見を述べたり、また関係

＊山口大学教育学研究科大学院生

の委員として連携そのものに携わってきた。このような当事者として実感してきたことのひとつに、連携は課題の把握と共有化がはかられぬまま進みがちであるということがある。

本稿はある中学校区について、主に吉田（筆者）の視点から、課題の把握とその共有化がいかに行われていったのか、またその際どのような問題が生じ、それがどう解決されたのかを中心に記述していくものである。この中学区において吉田は、教員、委員として連携の推進、関係調査の企画・実施などにあたり、まさに直接的に連携を進めてきた。もう一人の筆者である佐々木は、吉田の実践を研究面で支援し、また他の中学校区との比較考察を行うなかで、この中学校区における連携を相対化することに努めてきた。２人はここでの「連携」からの距離の違いを互いに十分意識しながら、検討や協議を重ねてきた。その一部をまとめたのが本稿である[4)]。

現在、多くの小中学校が連携初期段階にあると思われる。一事例ではあるが、中学校区の取り組みを具体的に記述し考察を加えることで、同じような段階にある学校の連携推進に資する実践的研究資料を提供できると考える。具体的には、連携が始まっていく様子、「課題」把握のために実施されたアンケート調査とその結果、その調査結果を受け中学校区で初めて行われた小学６年生による「中学校体験入学」、そしてその体験入学後に再び実施したアンケート調査結果の順に、連携初期段階を時系列に沿って記述し、考察を加える。

１．連携の始まり

まず簡単にこの中学校区（Ａ中学校区）について紹介しておきたい。Ａ中学校区は、ある地方都市の郊外に位置している。校区内には幹線道路が走り住宅団地も点在しているが、さほど大きな繁華街があるわけではなく、広々とした田園風景が広がる自然に恵まれた地域である。

Ａ中学校区内には中学校１校、小学校３校がある。小学校を卒業した子どものほとんどは校区内の中学校に通う。これら４校は、最も遠い学校間でも８キロメートル程度の距離に位置している。学校はいずれも小規模校で、中学校は生徒数約280人、学級数は計11学級で１学年に３～４学級、小学校３校はいずれも児童数200人前後、計８～９学級で１学年１～２学級である。子どもたちの問題については、万引きや他校の児童・生徒との対立はあまり聞かれないが、喫煙や不登校、暴言はあるらしいとのうわさを保護者から聞くことがある。

平成17年12月、吉田はこの４校で小中連携教育を推進したいと自身の勤務する小学校（Ｂ小学校）で提案した。これがすべての始まりであった。なぜこの提案をしたのか。背景には次のような思いがあった。吉田はＢ小学校で、ある学年の担任となった。その学年（単学級）は過去にいわゆる学級崩壊の状態に陥ったことのある学年である。複数の者による特定の者へのいじめ、教師への暴言、器物損壊、低学力などの問題があった。吉田はイベントへの取り組みや、「フリートーク」[5)]を実施するなどして、幸いにもその学年を立て直すことができた。卒業の日、教職員の誰からも別れを惜しまれるほどに成長した子どもたちの姿を見ていると、喜びと同時に次のような思いが沸き上がってきた。

- ●児童の自己有用感や自尊感情を高める指導をぜひ中学校でも継続していただきたいのだが…。
- ●低学力の児童が数人いる。特別な支援が行われないと中学校入学後に学習面で不適応行動を起こし、やがてそれが生活面での不適応行動に繋がっていく可能性がある。
- ●友人関係が変わることで規範意識が崩れることが心配される。クラス編成には細心の注意

を払ってほしい。そのためには中学校と合同で協議する必要があるのではないか。

こうした思いを強くした吉田は、勤務校と中学校との連携だけではなく、中学校区を単位としたより広い小中連携が必要だと感じる。中学校に進学しているのは３小学校の卒業生である。同様の問題は小学校１校と中学校との間に限られたものではなく、３校すべての小学校と中学校との間に存在し得るのではないか。連携が中学校区内すべての学校において推進されてこそ、その意義は高まるはずである。吉田はこう考えた。

２．連携初期の「課題」

幸いＢ小学校内では校長、教職員の理解を得ることができ、小中連携に向けた最初の一歩はスムーズに踏み出せた。平成18年１月、吉田は校長から発案してもらうかたちで４校合同での会議を提案した。残念ながらスケジュールが合わなかったり趣旨説明が十分行き届かなかったりしたため４校すべてがそろうことはなかったが、発案者側のＢ校と中学校の２校とで会合をもつことができた。平成18年２月、まず中学校側の教務主任と特別支援教育担当者の２名に６年生の授業を参観してもらい、気がかりな児童の様子を見てもらった。その後、小学校側からそうした児童を中心にこれまでの指導経過を報告した。４校中２校だけの会合ではあったが、とにもかくにも小中連携に向けて動き出した。

年度が改まった平成19年１月、吉田の提案により、Ｂ小学校が発案するかたちで４校合同の会を開催した。この間、体制そのものが整備されていなかったり、日々の仕事に追われがちであったことなどから、連携は停滞していた。今度は４校の教員が顔をそろえ、会の名称も正式に「小中連携合同情報交換会」になった。４校からの出席者は合計12名であり、各校が学校の様子や課題を語った。先ほど述べたような思いを抱いていた吉田は、中学校でも継続的な指導をお願いしたい気持ちはあったのだが、言えなかった。今後世話役校を４校で輪番制とすることなどが合意された。

この会議は全４校参加であり、前回と比べると大きな前進であったが、同時に課題も明らかになった。本音を出し合うことをねらいとしていたのだが、会の名称が「情報交換会」であったことが影響したのか、各校の取り組みの成果や課題を報告し合うだけのものに終わってしまった。出席していた同僚教員からも、「中学校に要望したいことはいろいろあったが、言い出せなかった」、「中学校では、不登校の生徒にどういう対応をしているのか聞けなかった」といった声が会議終了後に聞かれた。吉田も同感だった。

もちろんこれは小学校側に身を置く者の意見であり、中学校側の出席者はまた別の考え方をもっていたと思う。会議の進行それ自体に問題があったというよりも、それまで会ったこともない教員同士が短時間のフォーマルな場でいきなり腹を割った話し合いをするのは困難であると思われた。少なくとも幾人かの参加者は、学校間、とりわけ小・中学校間に意見の違いがあること、そしてそれが相手に伝わるようなかたちではなかなか出てこないことを強く感じていた。どのようにすれば本音で語り合える会にできるのか。この点が大きな課題として残された。

そこで吉田は、19年11月に開催された次の会議でまず会の名称変更を提案した。小中連携のための「情報交換会」を「推進委員会」に変えてはどうかという提案である。単なる情報交換ではなく実質的に小中連携を推進すべきである。そのためには小中連携教育に対する教職員の関心・意欲を高め、連携の視点から日頃の教育活動を批正的に見つめ課題を発見し、その課題を解決する意識を共有していく必要がある。この提案は受け入れられ、名称は変更された。推

進委員会の委員長は世話役校の校長が務めることになった。小中連携の推進体制が少しずつではあるが整備されていった。

この会議で吉田は、もうひとつ別の提案もしてみた。それは児童と教員を対象にした意識調査の実施である。小中連携に限らず新規に何かを始める際、本来まずもって必要なのは実態を知る、課題を知ることである。にもかかわらず、それが行われていない。よくＰＤＣＡなどというが、計画（Ｐ）を立てるにもそもそも現状を知らねば計画は立てられない。それが予備的なチェック（Ｃ）であり、リサーチと言い換えてもよいだろう。とりわけ小中連携においては、当事者であるところの６年生児童が小学校から中学校への移行（トランジット）をどのように感じているのか、その把握の重要性を訴えた。

学級崩壊を起こすほどに荒れていた子どもたちが立ち直り、中学校へと進学していく時に抱いた子どもを思ういささか不安な気持ち。そして中学校での自己有用感の継続的な指導への期待。限られた時間でのフォーマルな会議では、その思いを「言えなかった」のだが、仮に言ったとしても、はたして聞き手、特に中学校側関係者に納得してもらえただろうか。それだけのデータや根拠は手もとにはなかった。小中連携を始めはしたが、実は何が課題であるのかがわかっていないまま、とにかく連携をと考えていたのではないか。我々の課題は一体何なのか。これがはっきりしていない。小中連携を推進する、そのために会議を開催するにしても、まず実態が把握されていなければ、生産的に議論を進めていくことはできないし、連携の方向性も見い出せない。それをはっきりさせることが実は最大の「課題」ではないか。こう感じられた。認めていただければ早急に課題の把握を行いたい、自分にはそれを担当する用意がある。吉田はそう力説した。

この提案は了承された。吉田はＡ中学校区における小中連携とそれに関するアンケート調査やインタビュー調査に取り組み、実態および課題の把握に努めてきた。吉田は教員であるが、同時に中学校区内の小中連携を特に調査研究の面から推進する役割を担うことになった。調査結果は「推進委員会」を通じて各学校現場に提供される。それを踏まえるかたちで、現在、連携は進行中である。

３．課題を探るために行った意識調査

以上のような経緯から、小学６年生と小・中学校の教職員を対象にした意識調査を実施した。紙幅に制限があるので、本稿では６年生対象の調査結果についてのみ紹介する。

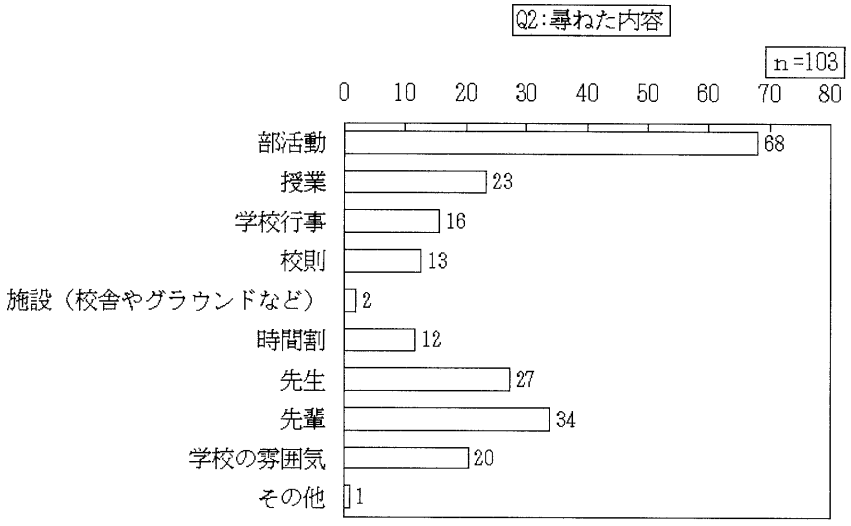
中学校進学に際し、小学６年生はいかなる不安を感じ、その不安軽減のために何を望んでいるのか、またどのようなソースから情報を得ているのか。６年生の考えや行動を知ることが何よりも先決であると吉田は考えた。３小学校の小学６年生全員103名（Ｂ小学校42名、Ｃ小学校34名、Ｄ小学校27名）を対象に平成19年11月下旬に実施した。調査票は３校の連携推進委員、学級担任を通じて６年生に配布してもらい、学校内で回答、即時回収した。回収率は100％であった。

調査内容は、⑴児童の中学校生活に関する情報収集の様子、⑵中学校生活の具体的内容に対する児童の期待感や不安感、⑶中学校生活全般に対して抱いている印象、⑷中学校体験入学実施に対するニーズ、である。また学校名、性別に加え、氏名も記入してもらう方式をとった。記名方式は意識調査としては例外的であることは承知しているが、以後の継続的な個別指導に役立てたいとの思いからそのようにした。

① 中学校生活に関する情報収集の実際

まず注目されるのは、中学進学を４ヶ月後に控えた６年生のほとんど（88%）が、自分なりに中学校生活の情報を収集しようと試みた経験があることである。中学校生活への関心は高く、６年生は自主的な情報収集活動を行っている。中学校生活について児童が寄せる関心は多岐に渡っていたが、なかでも「部活動」について尋ねていた児童が最も多かった（68%、70人）。次いで「先輩」、「先生」、「授業」、「学校の雰囲気」の順であった（図１、複数回答）。

図１　尋ねた内容



知りたいことを尋ねるために聞いた人・利用したものについては、「中学生の知り合い」が最も多く（40%、41人）、「親」、「同じ年の友達」、「姉（中学生）」の順に続く（図２、複数回答）。

次に、そうした情報収集により知りたい情報を得ることができたかどうかを尋ねてみた。「少しわかった」と答えた児童が尋ねたことのある児童の75%を占めた。しかし「十分わかった」と答えた児童は14%に留まり、逆に「あまりわからなかった」、「まったくわからなかった」という者もそれぞれ７%、４%いた（図３）。

現状では、中学校生活について多くの児童は十分満足のいく程度には情報収集を行えていないことがわかる。そのことはＡ中学校についての情報を提供する場が公式にはほとんど用意されていないことからも容易に理解できることではある。中学進学を控えて、６年生たちは自分たちで情報収集を行い、ある程度の「答え」を得ているわけではあるが、このようにして獲得された情報が不適切であったり、誤りを含んでいる可能性もある。中学入学を控えた児童に対し、学校側から児童が安心できる情報提供の機会を設ける必要があるとの思いを吉田は強くする。

図２　聞いた人・利用したもの

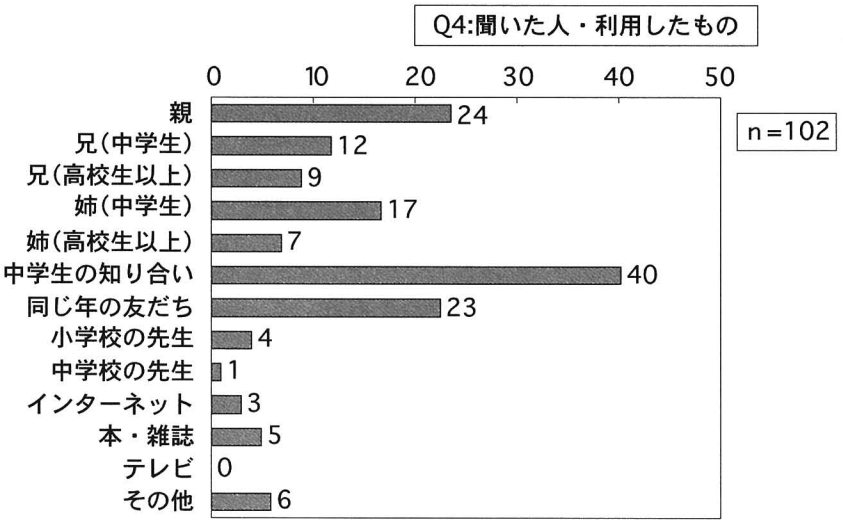
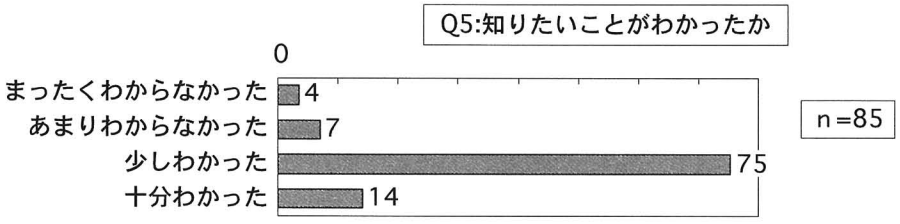


図３　知りたいことがわかったか



② 中学校生活に対する期待と不安

「部活動」や「テスト」など、中学校生活における代表的な活動16項目に対する期待感、不安感を尋ねた（図４）。「部活動」、「学校行事」、「休み時間」、「給食」などは楽しみにしている児童の割合が大きいが、逆に「授業」、「テスト」、「校則」、「異性との関係」、「中学校の先生との関係」などは不安に思っている児童の割合が大きかった。この16項目のうち「一番楽しみにしているもの」は何かを尋ねてみると、「部活動」が45％で圧倒的に多かった。「部活動」は最も楽しみにされている活動なのである（図５）。

楽しみにしている理由をアンケートの自由記述から拾ってみると、「サッカーをやりたい」、「運動が好きだから」というように、運動、スポーツに対する期待感を回答した児童が18人と最も多かった。次いで「楽しそう」、「早くやってみたい」といった漠然とした興味（15人）、そして「友だちと頑張れそう」「友だちができそう」などのように、友だち関係の構築への期待（８人）が続いた。

楽しみにしているものとして「部活動」の次に多く選択されたのは、「違う小学校の人と友達になること」（25％）であった。すでに述べたように、Ａ中学校区では３小学校の卒業生が中学校で一緒になる。それにより新たな友達ができることを楽しみにしているのである。一番楽しみなことが、「部活動」と「違う小学校の人と友達になる」の２つに集中していることは注目される。

図４　中学校生活に対する期待と不安

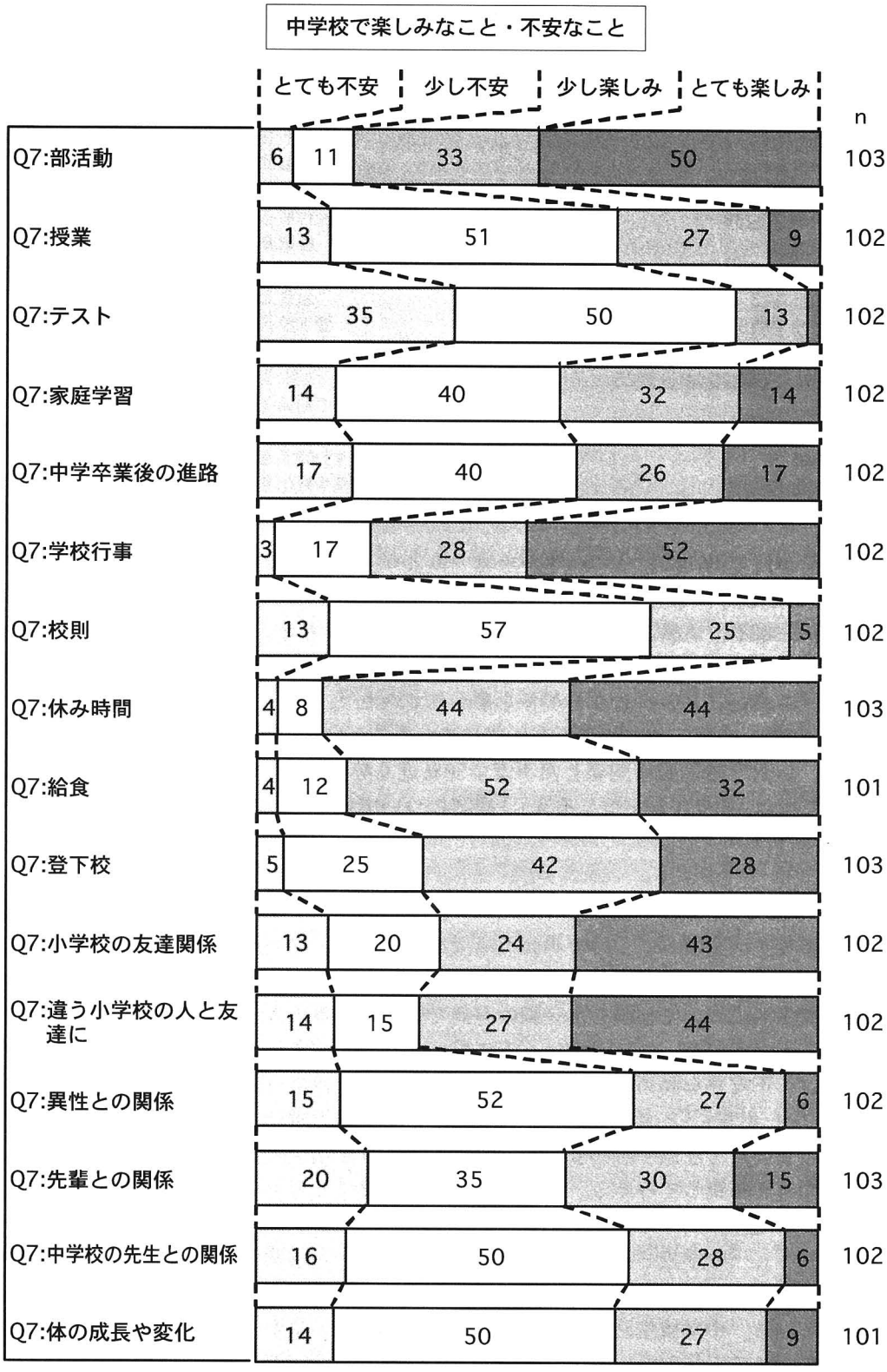


図５　一番楽しみなこと

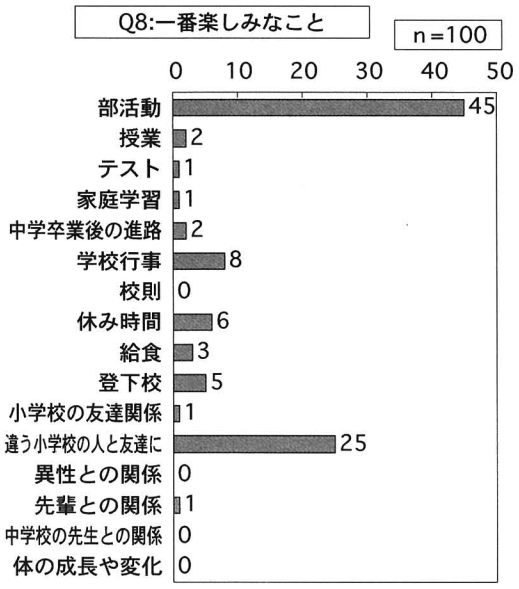
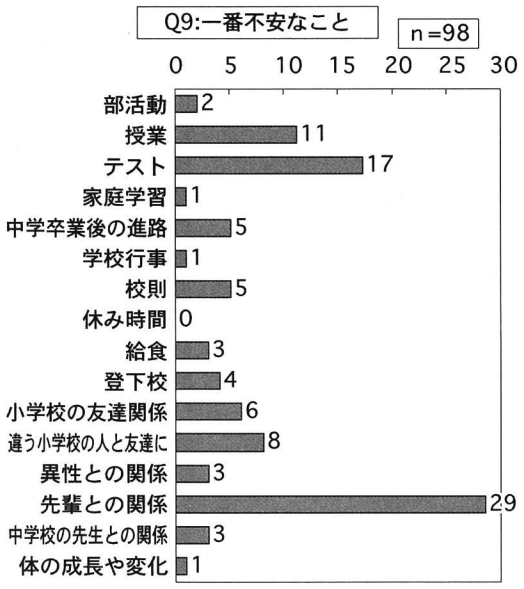


図６　一番不安なこと



次に、児童が何を不安に思っているかを見てみよう。先ほど述べたように、不安感が高い上位項目は、「授業」、「テスト」、「校則」、「異性との関係」、「中学校の先生との関係」であった（図４）。しかし、「一番不安に感じていること」は何かと尋ねてみると、それは「先輩との関係」(29%)であることがわかった（図６）。自由記述を見てみると、その理由として「いじめられるかもしれない」、「こわい」といったことが多く書かれていた[6)]。

「先輩との関係」に次いで児童が不安に感じていることは、「テスト」である。これに「授業」を加えると、いわゆる勉強に関係した不安で30%近くを占める。「テスト」や「授業」を選択した理由としては、「テストが難しそう」「授業についていけないかもしれない」といったことが多く述べられた。

③　中学校生活への期待と不安

次に「中学校生活全般」について尋ねた結果を見てみる。「少し楽しみ」「とても楽しみ」と回答した者が全体の67%を占めた(図７)。全体的には楽しみにしている者が多いことがわかる。しかし中学校生活について相談した経験の有無で区分してみると、相談経験のある児童は楽しみにしている者が多いが、ない児童は不安に思っている者が多い。適切な相談相手や相談機会がないことが、不安感を高めている要因になっているのではないかと思われる。

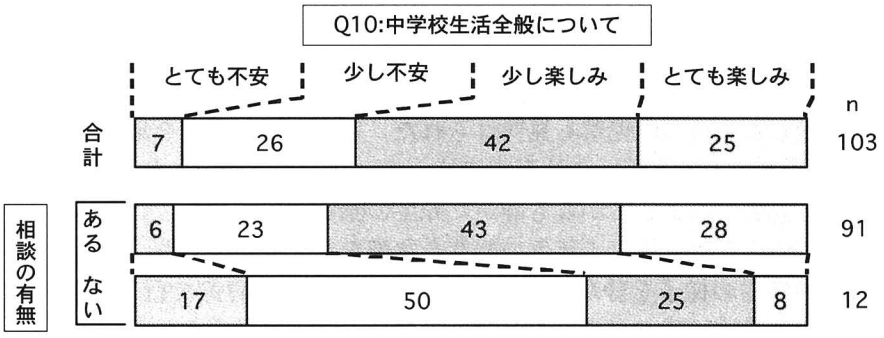
加えて、「少し不安」「とても不安」を合わせると30%の児童は中学校生活を心配しているわけだが、このことにも注意する必要がある。実は中学校生活全般を「とても楽しみ」と答えた児童26人の回答を精査してみると、うち６人は個別には「とても不安」に感じている事項があると回答している。例えばある男子児童は、中学校生活全般は「とても楽しみ」なのだが、「部活動」、「テスト」、「中学校卒業後の進路」、「同じ小学校の友達関係が続くこと」、「違う小学校の人と友達になること」、「先輩との関係」、「体の成長」の７項目はいずれも「とても不安」であると答えている。中学校生活全般に対し期待感を示しているから、これら個々の不安も乗り越えていってくれると信じたいが、学校側は彼がこうした不安感を抱いていることを知り、そ

れが軽減されるよう適切な支援を行っていきたいところである。

④　中学校体験入学実施に対するニーズ

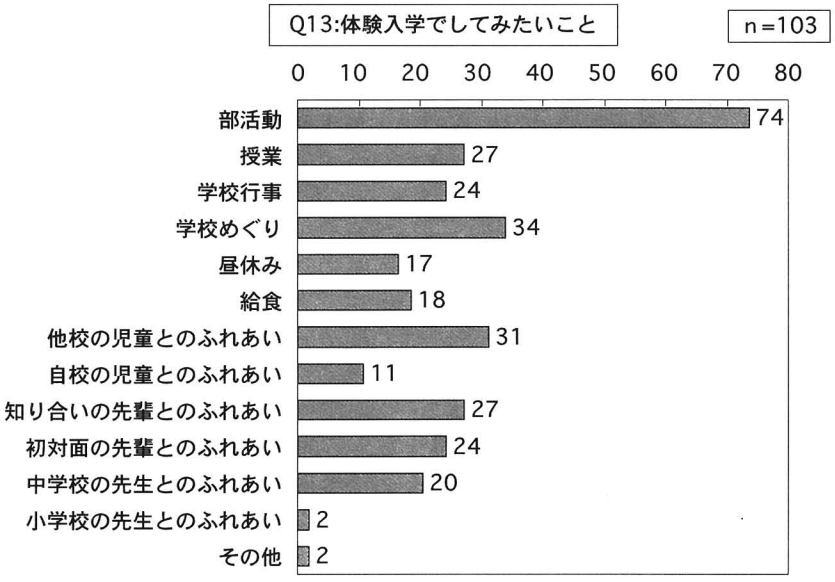
小中の連携の内容は様々である。授業での連携、運動会など学校行事での連携、部活動での連携などがある。このうち、小学校から中学校への子どもの移行を考えた場合、心理的不安感を軽減させてくれる機会として体験入学が考えられる。中学校の学校案内（オリエンテーション）は従来から行われているが、それは教師による説明が中心であって、実際の授業や部活動を見学する、体験的に参加するというようなことはこれまでＡ中学校区では行われていない。

図７　中学校生活全般への期待と不安



そこで中学校体験入学に興味があるかどうかを尋ねてみた。その結果、「とても興味がある」、「少し興味がある」を合わせて85％の者が興味をもっていることがわかった。中学校体験入学をするならどんな体験をしてみたいかを尋ねたところ、「部活動」の希望が最も多かった（図８、複数回答）。他にも「学校めぐり」、「他校の児童とのふれあい」、「授業」、「先輩（初対面＋知

図８　体験入学でしてみたいこと



り合い）とのふれあい」、「学校行事」、「中学校の先生とのふれあい」など、希望は多かった。

ある程度予想はしていたのだが、中学校体験入学のニーズは非常に高かった。この調査を実施したのが平成19年11月だったので、体験入学を実施するにしても時間的な余裕はあまりなかったのだが、この調査結果は関係者間で共有され、「ぜひやってみよう」という気運は高まった。翌年１月、Ａ中学校区における初めての中学校体験入学が実施されたのである。

４．初めて行われた中学校体験入学

小学６年生児童を対象とした上記のような調査結果を踏まえ、Ｂ小学校では「中学校体験入学」を実施する計画を立てた。関心を示した小学校は他にもあったが、日程的に難しいとの理由で参加はＢ小学校だけになった。受け入れ校である中学校からも快諾が得られ、平成20年１月16日午後、６年生児童42名が中学校を訪れた。吉田もこれに同行した。

当日６年生はいつもより早めに給食を食べ、引率教員とともに予定通り中学校へと向かった。到着時は少し緊張した面持ちの児童も見受けられた。普段は他人の話を集中して聞けない子どももいるのだが、開始まで落ち着いて体育館で待っていた。走り回ったり、私語をする者はまったくいなかった。説明が始まってからも静かに先生の話を聞いていた。

中学校側から説明を受けた後、１年生の授業を参観をさせてもらった。児童らはメモをとりながら、先生や中学生の様子を静かに観察していた。その後体育館で行われた「質問タイム」では、あらかじめ中学校に送っておいた質問を中心に、その場で出された質問に対しても中学校の先生や１年生が丁寧に答えてくれた。

体験入学の日程と内容は次のとおりである。

【日程】

13：15	中学校到着（Ｂ小学校から徒歩20分）
13：20〜13：30	体験入学に関する中学校からの説明
13：30〜13：35	最初の授業参観クラスへの移動（15分ごとに移動）
13：35〜14：25	授業参観（１年１組：国語、２組：社会、３組：英語）
14：25〜14：30	体育館へ移動
14：30〜15：00	質問タイム ・事前質問に対する中学１年生総務委員（６人）からの回答 ・総務委員や中学校教員（２人）への自由質問
15：00〜15：15	休憩
15：15〜15：45	部活動見学 ・自由見学 ・部の先輩へのインタビュー
15：50	下校（Ｂ小学校へ）

質問内容はおよそ以下のとおりであった。「授業を教える先生は、教科によって変わるのですか？」、「どんな教科がありますか？」、「勉強は難しいですか？」、「宿題はどれくらいありますか？」、「授業の時間は何分ですか？」、「どんな委員会がありますか？」、「休み時間は何分ですか？」、「どんな校則がありますか？」、「どんな部活動があるのですか？」、「部活の人数は制

限があるのですか？」、「部活動には絶対参加しなければいけないのですか？」、「小学校にはない教室がありますか？」、「クラスの人数はだいたい何人くらいですか？」、「勉強は難しいですか？楽しいですか？」、「家での自主勉強は、どんなことをしているのですか？」、「先輩と後輩の関係はどうですか？」、「全校で集まって遊ぶことはありますか？」、「中学校に入ってなかなか慣れなかったことは、どんなことですか？」、「入学してすぐに違う小学校の人とも友達になれましたか？」

こうした「質問タイム」の後、児童は30分という短い時間ではあったが友達と自由に部活動を見学した。なかには自主的に中学生相手に質問する児童も見られた。あっという間に時間は経ち、帰りのための集合時刻となった。自然とできたグループごとに校内を自由に見学していた６年生たちは全員が時間を守り、お世話をしてくださった中学校の先生にお礼を告げて小学校へ帰った。

５．軽減された不安感－体験入学の成果－

中学校体験入学の成果がどのようなものであったのかを検証するため、体験入学の翌日、吉田は調査票を児童（体験入学に行ったＢ小学校６年生児童41名）に配布し、(1)中学校生活に対する児童の意識、(2)中学校体験入学に対する児童の満足度、(3)児童が捉えた小中学校間の違い、について調べた。調査項目は、比較可能性を高めるため、体験入学の前に行った11月実施時のものとほぼ同じにした。

「とても不安」、「少し不安」、「少し楽しみ」、「かなり楽しみ」の回答をそれぞれ１～４点で点数化し、その平均値を算出した（表１）。体験入学実施後は、16項目中14項目で児童の期待感は向上した。

表１　体験入学の前後における期待感の変化

中学校生活の具体	11月時平均値	体験入学後平均値	差
卒業後の進路	2.56	2.29	-0.27
同じ小学校の友人	3.08	2.93	-0.15
給食	3.08	3.10	+0.02
違う小学校の友人	3.08	3.12	+0.04
異性との関係	2.15	2.20	+0.05
休み時間	3.33	3.39	+0.06
登下校	2.98	3.07	+0.09
学校行事	3.10	3.20	+0.10
校則	2.10	2.22	+0.12
身体の変化	2.11	2.24	+0.13
テスト	1.72	1.85	+0.13
部活	3.30	3.46	+0.16
授業	2.15	2.32	+0.17
家庭学習	2.28	2.54	+0.26
先輩との関係	2.30	2.66	+0.36
先生との関係	2.18	2.61	+0.43
全体の平均	2.56	2.70	+0.14

①　中学校教師に対する不安の軽減

なかでも、中学校の先生との関係に対する期待感は高まった。「とても楽しみ」という児童は、体験入学実施前にはわずか１人（２％）しかいなかったのだが、実施後は８人（20％）に増えた（図９）。逆に実施前は、「とても不安」、「少し不安」という児童が30人（71％）を占めていたが、実施後は20人（48％）に減っている。体験入学で直接教師とふれ合うことで、中学校の教師に対する印象はずいぶんとよくなったようである。

自由記述のなかにも、「先生がみんなを笑わせていた」、「おもしろい。わかりやすく教えている。いつも明るそう」、「優しそうで楽しそうだし、わかりやすく教えていた」といった記述が見られた。

②　先輩に対する不安の軽減

もうひとつ大きな変容が見られたのは、「先輩との関係」である。先に述べたように、Ｂ小学校の６年生児童は、特に先輩との関係を不安視して

いた。

しかし体験入学後は、児童の不安感は減り、逆に期待感は高まった。体験入学前の意識調査では不安感を示していた児童が26人（62%）いたのだが、体験入学後は19人（46%）に減った(図10)。そのうちの２人は、「とても不安」だったものが「とても楽しみ」に変わっている。こうした変容は、授業や部活動中の生徒の様子や、質問タイムや部活動見学中にふれ合った生徒から受けた印象が影響していると当日の様子を参観していて感じた。

自由記述のなかには、「先輩たちが下の学年にやさしそうだった」「みんなすごくおとなしかった。大人っぽい感じだった」「身だしなみがよくて、みんなかっこよく見えた」などの記述が見られた。

図９　中学校の先生との関係－体験入学前後－

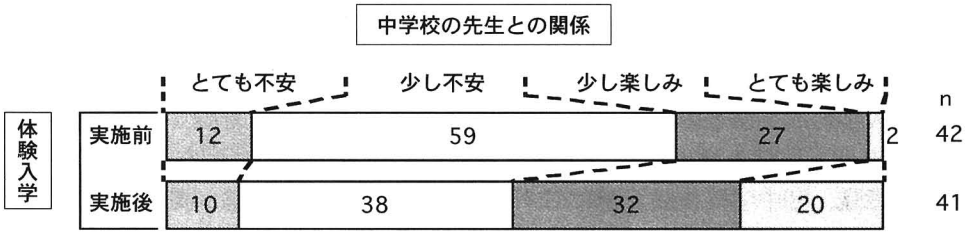
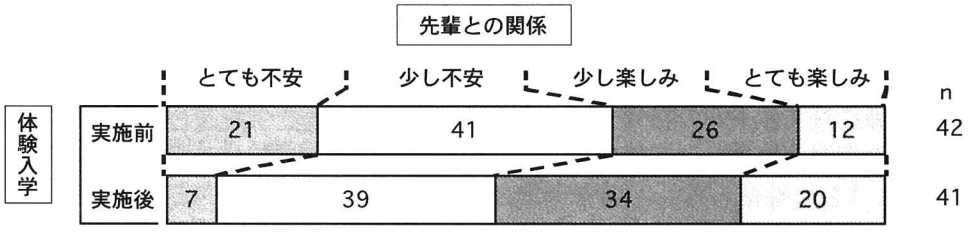


図10　先輩との関係－体験入学前後－



③　進路と友達関係の継続についての不安

体験入学後に児童の不安感が増した項目が、「中学卒業後の進路」と「今の小学校の友達関係が続くこと」の２つであった。このうち、まず「中学卒業後の進路」について見ると、体験入学前調査で不安感を示していた児童数は22人であったが、体験入学後は28人に増えている。逆に「とても楽しみ」に感じていた児童数は、９人から５人へと減った。またこのうち２人は、「とても楽しみ」だったのが「とても不安」へと変わっている。体験入学前の調査段階では中学卒業後の進路を漫然と考えていた児童が、体験入学を通して、より具体的にそれを考えざるを得ない状況に追い込まれ、不安感を感じたのではないかと思われる。吉田は自身の観察から、高校受験に備えて中学３年生が部活動を引退して帰宅する姿を見ることで、中学卒業後の進路まで現段階で見通せていないことに不安を感じたのではないかと考えている。

次に、「今の小学校の友達関係が続くこと」について見てみると、体験入学前調査と比較して「とても楽しみ」に感じている児童数が21人から16人へと５人減っている。そのうち２人は「とても楽しみ」から「少し不安」に、３人が「とても楽しみ」から「とても不安」に変容し

たことがわかった。これは、中学校体験入学との関連というよりは、今の小学校生活において何らかの問題を抱えているのではないかと考えられる。該当児童に話を聞く必要があると吉田は考えている。

④　中学校体験入学に対する児童の満足度

中学校体験入学全般について、それが自分にとって役に立ったかどうかを尋ねたところ、「とても役に立った」20人、「少し役に立った」18人であった。また、「先輩が優しかった」、「授業や部活動のイメージができた」、「学校の雰囲気がわかった」など、体験入学に満足し、不安解消に繋がったと書いていた自由記述が８割強であった。大部分の児童は中学校体験入学に満足したと思われる。全般的にみれば、体験入学は生徒の不安感を低減させ、逆に期待感を高めるという期待した結果を生んだといえる。

ただし、「先輩との関係がどうなるかわからない」や「先生によってやさしさが全然違った」のような自由記述も一部にはみられたし、「いろいろな場所を見学したかった」、「授業を少ししか見れなかったし、話せなかった」、「部活や授業の様子がわからなかった」、「（今回体験したようなことはすでに）知っていた」等、活動への不満を表した記述もあった。これらを課題として受けとめ、今後の中学校体験入学にいかしていきたい。

おわりに

以上、Ａ中学校区における小中連携開始からおよそ２年の足取りを、６年生児童対象の調査結果を交えながら述べてきた。連携初期段階における課題の把握（意識調査）とその共有化（調査結果の提示）が有効であったことを今一度記しておきたい。

今回、中学校体験入学に参加しなかった小学校の校長も「うちでもぜひ来年は」と言われている。未知の場所に踏み込む際の不安は多かれ少なかれ皆が感じていることであろうが、中学校進学のようなものは過去の小さな不安として忘れ去られることも多いように思う。しかし、当事者にとっては小さなことではない。中学校体験入学によって中学校に対する不安が軽減され、またその体験入学が仮に他の小学校の児童との初めての出会いの機会となるとすれば、中学校生活への期待も高まるように思う。いずれにしても中学校体験入学は成功であった。今後は、その後中学校に入った当時の６年生がはたしてどのように「中学校」を感じたのかを調査していきたい。

最後に、ここまでお読みいただいた方はすでにご承知のように、本稿では吉田（筆者の一人）の名前を意図的に用いてきた。吉田は対象中学校区内の小学校教員であり、小中連携のための担当委員でもあり、同時に現在大学院で学ぶ学生でもある。吉田は、ある時は実践者(practitioner)として、またある時は研究に携わる者（researcher）として参加型のアクションリサーチ(participatory action research）を行っている。もう一人の筆者である佐々木は自身も別の地域で小中連携のための委員を務めるなど連携の実際にも関わっているが、このＡ中学校区における連携については、吉田を指導する立場から吉田を介して間接的に関わるというポジションにいる。小中連携という具体的な事象への距離の違いを意識し、また効果的に活かした共同研究のあり方については、今後さらに検討し、その質を向上させていきたいと考えている。

注

1）全日本中学校長会『平成18年度小中連携・小中一貫教育に関する調査報告書』2006年、http://www.zennichu.org/0_old/index.htm よりダウンロード（2007年５月29日）。

2）なお小・中学校を「義務教育」という枠組みの下に一体的に捉える捉え方は、学校間連携以外の行政施策によっても、今後拡がりを見せると思われる。例えばそのひとつに「学校支援地域本部事業」がある。この事業により各中学校区に学校を支援する地域本部が置かれ、中学校区内の小・中学校を統括するかたちで学校を支援する体制がとられる。地域と学校の協力体制はもちろん、それを通じた小・中間、小・小間の連携は進むと予想される。

3）例えば、次の文献参照。西田芳正「大人になる—生徒の目から見た中学生活」志水宏吉・徳田耕造編『よみがえれ公立中学—尼崎市立「南」中学校のエスノグラフィー』有信堂高文社、1991年。酒井朗「選抜機関としての中学校—小学校との接続関係に注目して」木原孝博編『中学校教育の新しい展開第３巻　社会的自立をめざす生徒指導』第一法規、1995年。新潟県教育委員会編『中１ギャップ解消に向けて—中１ギャップ解消—』2007年。

4）本稿執筆においては、次のような書籍を参考にした（本稿他所で言及のものを除く）。

・天笠茂監修、呉市五番町小学校・二河小学校・二河中学校編著『公立小中で創る一貫教育—４・３・２のカリキュラムが拓く新しい学び』ぎょうせい、2005年。

・亀井浩明監修、品川区立小中一貫校日野学園著『小中一貫の学校づくり』、教育出版、2007。

・河村茂雄『データが語る学校の課題』図書文化、2007年。

・児島邦宏・佐野金吾編『中１ギャップの克服プログラム』明治図書、2006年。

・佐藤雅彰、佐藤学編著『公立中学校の挑戦–授業を変える学校が変わる—富士市立岳陽中学　校の実践』ぎょうせい、2003年。

5）フリートークは、まず一人の子どもが話題を提供し、それについてクラスみんなで話し合い、最後にその話し合いを受けて話題提供者が自分の考えを発表するというものである。話題は悩みや自分の興味関心に基づくものなど何でもよいが、「大人と子ども、どっちが得か？」のようにいずれかの立場に立っても話し合える話題が盛り上がり、子どもたちも意欲的に取り組んだ。このフリートークを「朝学の時間」を使って週４～５回実施した。その結果、子どもたちの聞く力が高まっていった。例えば、話し手を注視して聞いたり、発表を受けてジェスチャー等の非言語を交えながら反応を返したり、友達の考えに付け加えて自分の意見を構築する姿がたびたび見受けられるようになった。子どもたち自身、この変化、成長を認識していることが子どもの書いた文章からもわかった。

子どもたち自身この時間を心待ちにし、相手の話を一生懸命に聞いたり、自分なりに表現したりすることを楽しく嬉しく思えるようになったことが一番の成果であった。「もっと反論してほしい。だって楽しいんだもの。」これは、それまで友達からひどい仕打ちを受け、暗い表情で日々を過ごし、自己主張することもできないでいた子どもの１年後の言葉である。他者と対立することを恐れず、反論を重ね合えるようになり、意見交換を楽しんで行えるようになったのである。フリートークは、子どもたちの中に、自己表現する喜び、他者を大切に思う気持ち、自尊感情など、大切な感情を育てたのである。なお、「フリートーク」については、村田辰明『温かい仲間関係をつくる朝の会・帰りの会』（学事ブックレット—学級経営セレクト）学事出版、2006年を参考にした。

6）いわゆる「先輩」の問題は、中学生が経験する上下関係ではあるが、小学生時代の比較的厳しくない人間関係が突如として否定されるなかで経験するものであり、そのことをある程度事前に察知しているがゆえに大きな不安を抱いていると思われる(保坂展人『先輩が怖い—中学生に広がる新・身分制度』リヨン社、1989年など参照)。